

万吉だより

MA

GECHI

NEWS

第 18 号 平成 26(2014) 年 3 月

泥塔資料探索次第

館長 池上 悟

平成 25 年度における特別展示は「泥塔と瓦経」と題して、仏教系大学である立正大学の博物館が所蔵している仏教考古学関連遺物を取りあげました。この分野の先駆的研究は、長年における講義を通じて久保常晴博士、坂詰秀一博士などの多数の優秀な後進を育成され、立正大学における仏教考古学の指針を示された石田茂作博士により果されています。

泥塔は仏教の弘通した天竺・唐・朝鮮半島各地において発現しており、本邦においても白鳳期から始まり、古代・中世から近世まで様々な願いをこめて製作されています。本館所蔵の立体円筒形泥塔は、奈良県の特定遺跡からの出土であり、この遺跡からの出土資料は全国各地のさまざまなコレクションに含まれており、海外へも流失しています。

明治 41(1908) 年に大部な日本考古学概説書である“PREHISTORIC JAPAN”を横浜から刊行した英国人医師の Neil Gordon Munro は、明治 38 年に横浜三ツ沢貝塚を発掘したことで著名な人物ですが、蒐集した大量の日本考古学関連資料を母国のスコットランド国立博物館に寄贈しています。この資料中に 5 点の立体円筒形泥塔を含んでおり、20 年前の英国留学中に実測して報告したところです。（「海の彼方の泥塔」『標葉文化論究』平成 8 年）

一方、扁平泥塔資料は西国の各地から出土していますが、とくに伯耆国中部の鳥取県東伯郡琴浦町（旧赤崎町）の竹内経塚から昭和 10 年頃に多量に出土したものが全国各地の博物館、コレクション中に所蔵されています。経塚所在土地の所有者方には破片を中心とする数十点の資料が認められるのみであり、地元の教育委員会、倉吉市立博物館、米子市立山陰歴史館所蔵の足立正コレクション、鳥取県立博物館に総計 100 点ほどの資料が所蔵されています。また京都大学・國學院大學、東京・京都・奈良国立博物館などにも所蔵されており、本館寄託資料もまた竹内経塚からの出土資料です。可能な限りの資料調査によると、竹内経塚出土泥塔の基礎に刻まれた文字は法華経の経文であり、総数は 7 万点に及んだものと考えられます。（「伯耆赤碕出土の泥塔経」『考古学論究』第 6 号 平成 11 年）（「伯耆の仏教遺物」『立正大学人文科学研究所年報』第 49 号、平成 24 年）

竹内経塚出土の扁平泥塔資料を探索し続けて 20 年以上、未だ総体把握にはほど遠い現状です。願文、製作年代の明確化を課題として、今後も調査を継続していくつもりです。

第 8 回特別展 泥塔と瓦経

平成25年11月18日(月)から12月21日(土)にかけて、第8回特別展「泥塔と瓦経」を当館1階、第1展示室にて開催しました。

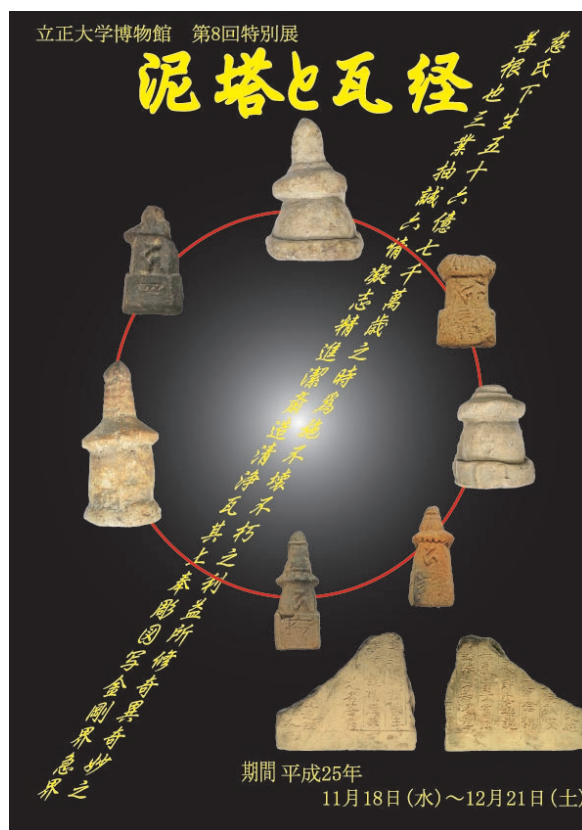
仏教系大学である立正大学では、考古学研究・教育においても、「仏教考古学」を一つの重要な特徴として推進してきました。当館では長い伝統を反映して仏教遺物も多く所蔵しており、過去の特別展・企画展において、「題目板碑の世界」(第6回特別展・平成21年)、「古代・中世の武蔵国の骨蔵器」(第7回企画展・平成22年)の2回、仏教遺物関連の展示をおこなってきました。今回は泥塔と瓦経の2種類の仏教関連遺物を取り上げました。

今回の特別展では、泥塔が当館所蔵資料の5点、当館寄託資料の12点、瓦経が当館所蔵資料の2点、さらに池上本門寺霊宝殿より借用した「兜木コレクション」中の資料の15点を展示しました。

特別展の開催期間の総来館者数は、218名でした。

次に当館所蔵資料及び寄託資料を中心に、展示した資料について紹介します。

泥塔とは、泥土を型抜きにして塔形に成形し、これを焼成したものです。また、瓦経は、方形あるいは長方形の平坦な表面の粘土板に経典を書写して焼成したものです。ともに仏教信仰に従って土をもとにして造形された作善業であり、様々な



第 8 回特別展チラシ

願いを込めて製作されたものです。たとえば、当館所蔵資料のように立体的な泥塔の底の部分には小さい孔をあけ、経典を入れて奉納するものがあります。このような泥塔の製作は奈良時代頃からはじまり、追善供養、息災延命、病氣平癒などの現世利益を願って作られたと考えられています。

また、瓦経は、釈尊の正しい教えがおこなわれなくなる末法の世に入ると信じられた永承7(1052)年以後に、経典を保存するためにはじまった埋経に伴って創案されたものです。埋経は、



博物館入口に設置した特別展看板



特別展展示の様子



立正大学博物館所蔵泥塔

(右1点、出土地不明。以外は東大福寺遺跡採集)

末法思想・浄土経の流行にともない、釈尊入滅の56億7千万年後に、末法の世の衆生を救済するために出現する弥勒菩薩に備えてはじまったものです。

当館所蔵の泥塔は、すべて宝塔形を呈するもので、その内の1点が出土地不明である以外は、奈良県北葛城郡広陵町の東大福寺遺跡で採集されたものです。これらの資料は、矢追隆家氏により立正大学考古学研究室に寄贈されたものです。これらの泥塔は、6 cmから8 cmの高さで、基礎・塔身・笠・相輪から構成されており、円筒形を基調としています。

これらの所産年代は明確にはなっていませんが、底部に小紙を納入するための小孔を有する資料が泥塔本来の造形と考えられ奈良時代、小孔を欠く資料が平安時代を主体として製作されたものと考えられます。当館所蔵資料のうち、出土地不明のもの1点と東大福寺遺跡採集資料の内、ほぼ完存品であるもの1点(左上写真・左から2番目)が小孔を欠くもので、それ以外のものが小孔を有しています。

当館に寄託された泥塔は、すべて伯耆竹内経塚(鳥取県東伯郡琴浦町)からの出土したものです。これらの資料は、長さ60 mm前後、厚さ15 mm前後で、基礎部分に1字を基本とする経文が記されています。これらの資料の正確な埋納年代に関しては不明です。なお、竹内経塚周辺の仏教文化的環境を考慮すると、赤碕の地に特徴的な「赤碕塔」の存在が重要な位置を占めるものと考えられます。これらの塔は紀年銘を欠いていることから



立正大学博物館寄託泥塔

(伯耆竹内経塚出土資料)

所産年代は明確になりませんが、これらを構成する個別要素の検討から14世紀の南北朝期を主体として造立されたものと考えられます。泥塔もまた、この頃の製作と考えられます。

当館所蔵の瓦経は、飯盛山経塚出土資料と伝・大和橘寺出土資料の2点です。飯盛山経塚出土瓦経は、福岡県福岡市西区に所在する飯盛山経塚からの採集品です。本資料を含む飯盛山経塚出土瓦経は、永久2(1114)年の紀年銘資料が知られ、瓦経片からの推定では、法華経208枚、無量義経23枚、勧普賢経21枚、仁王経39枚、阿弥陀経6枚、般若心経1枚の計297枚が埋納されたものと考えられています。当館所蔵資料は、『法華経』巻五安樂行品の破片です。

もう一つの当館所蔵瓦経は、大和橘寺出土と伝えられる一仏一字瓦経片です。この瓦経片は、側面及び底面の一部を遺存したもので、横41 mm、縦54 mm、厚さ14 mmを測る、焼成の良好な資料です。表裏両面には陽出の線によって蓮華座に坐



筑前飯盛山瓦経

した光背を有する仏像が表わされており、仏像の身体中央に経文1字（「法」と「優」）が刻まれています。本資料と酷似する資料が兵庫県朝来市の楽音寺から、類似する資料が京都府福知山市の道勘山古墳からそれぞれ出土しています。これらの一仏一字瓦経は、多数の仏坐像を彫刻した型を粘土板に押圧して表現したものです。

池上本門寺霊宝殿より借用した資料は、三重県伊勢市所在の伊勢小町塚瓦経及び兵庫県姫路市播磨極楽寺瓦経でした。

[大崎・熊谷移動展]

本学大崎キャンパスにおいて、平成26年1月14日(火)から1月29日(水)にかけて、熊谷市立妻沼展示館において、平成26年2月1日(土)から2月28日(金)にかけて、それぞれ移動展示(パネルによる特別展の紹介)をおこないました。また、同様の移動展を平成26年4月に立正大学附属立正中学校・高等学校においてもおこな

う予定です。

特別展の関連事業として、平成26年1月15日(水)に「泥塔と瓦経」と題して当館の池上悟館長による講演会が大崎キャンパスにておこなわれました。

なお、本学所蔵の泥塔と瓦経に関しては、平成26年4月より、1階第1展示室に常設展示する予定です。(学芸員 阿部常樹)



伝・大和橘寺出土瓦経



大崎校舎展示の様子



池上館長講演会の様子



妻沼展示館・展示会場入口



妻沼展示館展示の様子

「高則作」の日本刀

田嶋和久

通例、日本刀の作刀期は、①平安中期までの古代刀期、②平安中期～慶長年間以前までの古刀期、③慶長年間以降～明和年間以前の新刀期、④明和年間以降～明治9年（廃刀令発布）までの新々刀期、⑤明治9年以降～昭和20年の終戦までの近代刀期、⑥昭和20年以降の現代刀（美術刀）期の6期に区分されます（作刀期区分法はこれ以外にもいくつかのものがああります）。

一般に私たちが「日本刀」として思い浮かべるのは、反りをもつ片刃の刀剣ですが、日本刀は刃を下にして佩く「太刀」と、刃を上にして帯にさす「打ち刀」に分けられます。一説には奈良時代の国内平定過程戦闘をつうじ、両刃の剣に代わり反りのある刀としての太刀が生まれたと言われています。太刀は平安・鎌倉・南北朝・室町時代中期にわたって用いられ、その後、室町中期以降応仁の乱を契機とした戦法の変化から、日本刀は打ち刀へとその姿を転じることとなります。

日本刀が太刀から打ち刀へと姿を変えたのは古刀期にあたります。古刀期は600年程の長期にわたり、南北朝内乱、応仁の乱、戦国時代といった数多の戦乱を経験することにより、「折れず曲がらず、よく切れる」という鈍の頑丈さと剃刀の切れ味を兼ね備えた日本刀の性能は、その極致を迎えたとされます。しかし、古刀期の日本刀がどのような地鉄・作刀法により、どのような刀質をもつものであるかは未だ正確には分かっておらず、古刀期と新刀期の刀質には断絶があるという指摘がなされることもあります。その意味では、古刀期の日本刀は現代の技術で再現することが非常に困難であるということができるとでしょう。

この「高則作」の打ち刀は古刀期の中でも「数

打ち（粗製濫造）」が多くみられる末古刀期（室町時代後期）の作刀と鑑定されていますが、鑑定では刀質や美術価値は「数打ち」物とは一線を画する刀であるとされています。しかし、残念ながら「高則」がどの地方（国）のどの刀工集団に属する刀鍛冶であったかは不明です。

私自身、刀の鑑定眼を持ち合わせていませんが、主観的に評するならば、優美な姿で、刃紋は物打ち（切先部）が直刃、物打ちから柄に下がるにつれて華美過ぎることのない乱れを生じさせています。また、物打ちの棟の部分には、いわゆる「誉傷」が散見され、実際に戦場に出た刀であることが分かります（これは、研ぎでやや痩せたような姿であることから推測できます）。

恐らく一般の方は、日本刀にピカピカした印象を持たれていると思います。しかし、真剣の持つ光は決して眩いものではなく、青みがかった静かな光…とでもいう、一種独特な輝き方をします。日本刀と同じ美しく霊妙な光を放つものには未だ出会ったことがありません。

（立正大学文学部社会学科 准教授）

今年度、田嶋和久先生と稲澤徳多朗氏より日本刀を各一振寄贈していただきました。そのうち、田嶋先生より寄贈していただいた「高則作」銘の日本刀に関する紹介を、執筆していただきました。（学芸員・阿部）



茎部分・銘

切先部分



「高則作」日本刀・全体

NEWS

入館者数

平成 25 年 8 月 1 日から平成 26 年 1 月 31 日の 6 ヶ月間で、延 102 日開館し、総来館者数は 991 名でした。内訳は、一般の方 383 名、本学学生 118 名、本学教職員 29 名、高校生以下の方 82 名でした。以上の期間に熊谷キャンパスにおいてオープンキャンパスが 4 回行なわれました。その際の来館者数は 425 名でした。その内訳は、以下の通りです。

- ・ 8 月 4 日 183 名 ・ 8 月 24 日 102 名
 - ・ 9 月 22 日 64 名 ・ 11 月 3 日 30 名
- また、以下の皆様が団体で来館されました。
- ・ 9 月 19 日 熊谷市・直実市民大学 (83 名)
 - ・ 10 月 3 日 熊谷市見学バスツアー① (14 名)
 - ・ 10 月 17 日 熊谷市見学バスツアー② (19 名)
 - ・ 10 月 25 日 埼玉県立鴻巣女子高等学校
1 年生 (15 名)
 - ・ 10 月 31 日 埼玉県立吹上秋桜高等学校
2 年生 (16 名)
 - ・ 11 月 8 日 埼玉県立上尾南高等学校 2 年生
(37 名)
 - ・ 11 月 22 日 茨城県立岩井高等学校 1・2 年生
(25 名)
 - ・ 11 月 26 日 生きがい大学 (70 名)
 - ・ 11 月 29 日 埼玉県立吹上秋桜高等学校 P T A
(18 名)
 - ・ 12 月 11 日 熊谷市中央公民館 (35 名)

出版物

平成 25 年 8 月 1 日から平成 26 年 1 月 31 日までの期間に、当館では以下の出版物を刊行しました。

- ・『万吉だより』第 17 号 (平成 25 年 9 月 30 日)
- ・第 8 回特別展「泥塔と瓦経」図録
(平成 25 年 11 月 18 日)

資料活用

平成 25 年 4 月 1 日から平成 26 年 1 月 31 日までの期間に、当館所蔵の資料を以下の機関に貸出をおこないました。

- ・貸出機関：池上本門寺霊宝殿
- ・貸出資料

徳治三年銘題目板碑	1 点
嘉慶二年銘阿弥陀三尊板碑	1 点
久保常晴博士関連資料	3 点

 (『題目板碑の研究』(手書き)1 冊,
その他の手書き原稿 2 枚)
- ・貸出期間：平成 25 年 9 月 25 日(水)
～平成 25 年 12 月 7 日(土)
- ・利用目的：特別展「題目板碑と宝塔～中世池上の法華信仰と供養～」での展示。

館務実習

平成 25 年度の博物館学芸員課程の館務実習を以下の日程で延 8 日行いました。実習生は、3 名で、その内訳は、文学部史学科 2 名、科目等履修生 1 名でした。

○野外実習事前講義

- ・ 7 月 10 日(水) 6 限 大崎校舎
講師：池上 悟
(当館館長・本学文学部史学科教授)
- 7 月 14 日(日)と 28 日(日)におこなわれる池上本門寺での墓標調査に先立って、池上館長より近世墓標とその調査方法についての講義がおこなわれました。

○野外実習

- ・ 7 月 14 日(日)・28 日(日) 池上本門寺
担当：池上 悟(同上)・阿部常樹(当館学芸員)
- 東京都大田区池上本門寺にて墓標調査をおこないました。

○館務実習 熊谷校舎・当館

- 8 月 19 日(月)
講師：井上尚明先生
(埼玉県立自然の博物館館長)



野外実習の様子

- ・午前；文化史講義
博物館館務と資料調査に関する講義をしていただきました。
- ・午後；梱包実習
資料の運搬に際してのその梱包の仕方を講義していただき、実際に館蔵資料である土器類をもちいて、梱包の実習をおこなっていただきました。

● 8月20日（火）

- ・刀剣の取り扱い方に関する講義と実習

講師：田嶋和久先生

（本学文学部社会学科准教授）

午前に刀剣に関する解説および取扱についての講義をしていただき、午後、実際の刀を用いて、手入れの仕方に関する実習をおこなっていただきました。

● 8月21日（水）

- ・自然史に関する講義と実習

講師：川野良信先生

（本学地球環境科学部環境システム学科教授）

午前に岩石学に関する基礎知識について講義していただき、午後は、川野先生に事前に荒川河川敷にて採集してきていただいた岩石を用いて、標本の作製をおこないました。

● 8月22日（木）

- ・資料台帳作製実習

担当：阿部常樹（当館学芸員）

7月14日（日）及び28日（日）におこなわれた池上本門寺での墓標調査成果を台帳に

まとめる作業をおこないました。具体的にパソコンソフトでカードを作製しました。

● 8月23日（金）

- ・展示パネル作製実習

担当：阿部常樹（当館学芸員）

当館2階ロービーに展示されている近世遺跡出土の木樋の解説パネルの作製をおこないました。



刀の手入れに関する実習の様子



実習生の作製した岩石標本

土器焼き

昨年度に引き続き、平成25年度の文学部史学科の「考古学実習6」（4年生対象）において、土器の焼成が熊谷キャンパスの敷地内で行なわれました。実施日は平成25年11月2日（土）・3日（日）の2日間、担当講師は竹花宏之先生（文学部非常勤講師）、参加実習生は8名でした。

見学者の声

当館では、来館者の皆様の意見を博物館の運営や展示に反映する為メッセージ箱を備えております。なお、下記のご意見は寄せられたもののなかから事務局で集約したものです。貴重なご意見ありがとうございました。

・展示物(瓦経)の裏面も写真で見せてあったので、わかりやすかったです。展示図録も力が入っていてよかったと思います。これらからも良い展示がみられることを期待します。

※特別展へのご感想(本学学生・19歳 女性)

・今まで来たことがなかったのですが、とてもおもしろいですね！ (本学学生・21歳 男性)

・卒業前に見ておこうと思い来ました。ユニークな方ばかりいて面白かったです。立正にこんなすごいものがあるなんてびっくりです。在学は見るといいですね。授業の一環で見学するというカリキュラムを組んだ方がよいと思いました。

(本学学生・23歳 男性)

利用案内

所在地：〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

立正大学熊谷キャンパス内

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

開館日：月・水・木・金・土曜日(大学休業中を除く)

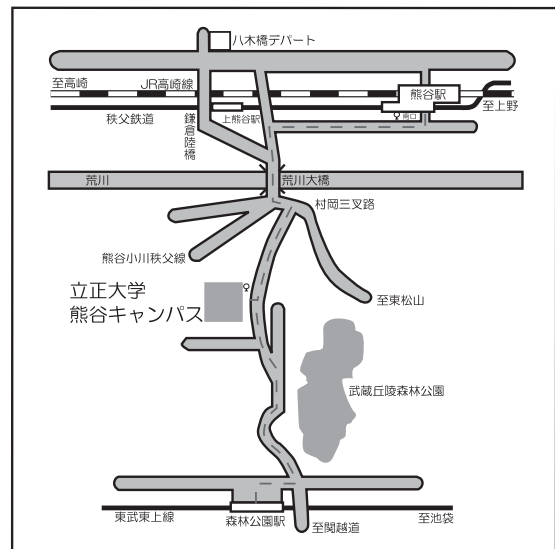
開館時間：10:00～16:00

※休館日(火・日・祝日)及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)

交通機関：

- ① JR 高崎線、上越・長野線幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際十王交通)で約10分。
- ② 東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際十王交通)で約12分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課
(048-536-6010)にご連絡下さい。



あ と が き

無事、1年が過ぎようとしております。

おかげさまで、今年度は3年ぶりに特別展を開催することができました。また、多くの方々にご来館頂き誠にありがとうございました。

今後とも、当館へのご支援を宜しくお願い申し上げます。

(博物館学芸員 阿部)

立正大学博物館館報 万吉だより 第18号

平成26(2014)年3月25日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

E-mail: museum@ris.ac.jp

URL: http://www.ris.ac.jp/museum/index